

大槌の歴史

大槌氏をめぐるナゾ 第10回

ハサマトの館については、「はさまた館」「狭田館」「七郎館」「十王館」などいろいろの呼び名が伝えられています。阿部五郎七郎が住んだといいますが、「七郎館」の名は理解できません。

ところが、はさまた館の主は狭田越前であつたともいわれます。そして狭田氏は本来は三浦姓であり、大槌氏滅亡のとき家臣一統離散するに際して大槌に居残り、当地方三浦氏の開祖になったというのです。江戸時代を通じて、その宗家(本家)は三浦宗兵衛を名乗り、一族枝葉は数家となつて一は大商人となり、一は大網師となり、あるいはまた医業を極めてみな大槌において繁栄したと伝えられます。

「三浦開祖狭田越前(の)墓」は江岸寺境内の、町内小枕住の三浦勝男家の墓所内にあつて、寛永九年(一六三二)、同十九年など町内で有数のふるい年号を刻む墓碑です。また同墓所内には三浦宗兵衛の墓碑も現存しています。

この館の主として阿部五郎七郎と狭田越前の二人が伝えられることについては、同時に二人の重臣

が配置されて居たのかもしれないが、ともに館主であつたとするならば、時間的なズレがあるのかもしれない。すなわち先の館主が存在し、それが他の任務に就いて転出した場合には、後任の館主が着任したはず、ということ。なお「十王館」については、他の館であろうとする説もあります。

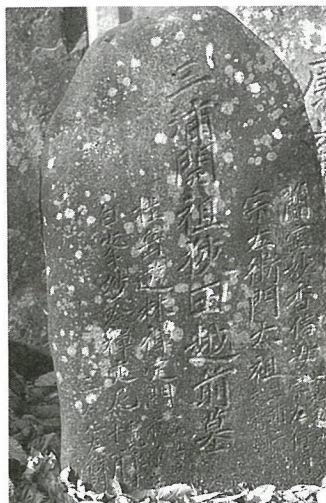
大槌城、金崎館、はさまた館の他に「大槌十館」としては、屋敷地内のくまん館と、小松野地内の小松野館を考へていいのかもしれませんが、他の五館についてはわかりません。ただ筆者が独断と偏見で考へているのは、金崎館同様に小規模のものが、大槌城南側山裾に並んで存在したのではないかということ。例えば本連載第七回の写真中に「観音」と記されている小鍾川べりの地点です。江戸時代に観世音が祀られたことから「観音平」と称されましたが、それもこの場所に適当な平場があったから利用されたものでしょう。

連載第一回目にあるように、永享年間に大槌へ押し寄せた南部氏の

の軍は、大槌城に総攻撃を仕かけたものでした。城中の兵は小鍾川を関所として矢先き揃えて防戦にあたつて、さすがの南部氏も攻めあぐんだというのです。この城中兵の拠つた陣地を、観音平に擬定してみることができそうです。

さて大槌氏がお預け謹慎の身となり実権を失うと、浜田彦兵衛が大槌地方支配のために入つて来ました。その懐には大槌地方の主要者たち(おそらく大槌氏の家臣たち)の名前とその各々の持ち高とを記した、南部氏から与えられた書状が抱かれていたのです。いったいどのような名前が記されていたのでしょうか。少し覗いて見ようではありませんか。

記されているのは合計五十九名



三浦開祖狭田越前(の)墓
一江岸寺境内一

加賀 戸沢
丹波 安戸(安渡か?)
筑後 くらさわ
将監 いなもと
将監 とうはい(東梅か?)

さて前回から、大槌氏家臣の者たちとはいいながら、現大槌町の範囲内の人名のみに触れてきてしましました。しかし、大槌氏が翼下に収めていたのは南は平田村から北は豊間根村まででした。史料に乏しいとはいえ、町外のことにも触れておかねばなりません。船越党が大槌氏に從属したこと、田の浜佐々木氏が大槌氏の配下として岩崎合戦に参陣し戦死していることは前に記しました。これらのほか大槌氏に属していたとされる館主クラスには、橋野(現釜石市)新城館の新城氏や、佐田内(前同)柏館の柏館新五兵衛などがあります。新城氏は橋野地方を与かつて橋野氏とも称したといえます。また柏館はもと安倍一族の館で安倍館といわれたものが、後に大槌氏の支配下に入つて、その家臣柏館氏の拠るところとなつたと伝えられています。

出雲 金沢吾野
縫殿 大久保(金沢か?)
兵庫 窪(金沢か?)
備中 折合
左京進 中山

町内沢山の阿部公一家に所蔵さ

れる『大槌村御検地野帳之写』は、大槌町の指定文化財です。天和元年(一六八一)に南部領内でおこなわれたすべての農地の測量調査の、大槌村分の記録です。田、畑などが一カ所ごとに上、中、下、下々にクラス分けされ、その地名、面積、年貢高と所有者名が記載されています。天和元年といえは大槌氏滅亡から六十年以上たつていることになりますが、主家恩顧の家柄はなお存続していたにちがいない。また、往時の荒武者さえも老いたりといえ健在であつたかもしれない。この記録は、次のような人名の天和元年時点での実在を証明してくれています。

ほら兵部 あらやしき出雲
大かくち嘉賀 たたこひ下総
石はね越後 里館宝鏡院
八日町左近 はなれ森将監
沢 大学 きもいり雅楽尉
(もち論この他にも多数ありますが、数例のみとり上げました)

大槌氏が殷勢をきわめていた頃、お正月ともなれば、微醺をおびたいなもとの将監は愛息子を伴つて安戸の丹波宅を訪れ、丹波の力カどのはドブクロなど用意して接待したりしていたのでしょうか。

文・町文化財保護審議会委員
花石 公 夫さん